総括セッション

進行：放送教育開発センター教授　永　岡　慶　三

進行　それでは時間がまいりましたので、本日最後の事業でございます、この後懇親会がございますが、総括セッションに入りたいと思います。時間は、17時15分までの予定でしたんですが、閉会の挨拶の菊川先生が時間をもう少しくれるということですので、若干延長が出来るかと思います。フロアの方からも意見やご質問がたくさんあると思います。私は朝からずっとここに座っているだけの役で、少しはまとめぐらいのことはやろうと思いましたけど、それもやめまして、出来るだけ質疑を、討論者、提案者、及びフロアの中で出来るように時間をとりたいと思います。それでは、フロアの方も、それから発表者、討論者の方も、特に方向性なく、どなたからでも、ご意見、ご質問があれば。質問の場合にはどなたへというふうに明確に区切っていただきたいと思います。是非、簡潔に、意見、ご質問をお願いしたいと思います。フロアからでも、こちらの壇上からでも結構ですが、どなたかいかがでございましょうか。どうぞ、ご自由に。こういう時はですね、最初に立ち上がりがなくて、最後、時間ぎりぎりになってから議論が沸騰するということが・・・。あ、どうもありがとうございます。はい、坂元先生お願いします。

坂元　佐賀先生のお話の中で、アトリビューション、原因帰属が出てきました。メディアと原因帰属の関係は大変興味深いんですが、例えば本を読んでよく分かったら、私は有能だからだという、能力のせいに帰属する。読書の場合は、私は努力したからよく分かった。テレビとかいろんなメディアの場合は、そのメディアがよくできていたからだ。そこまでおっしゃらなかったような気もしたけど、メディアがよくできていたからよく分かったというふうに、メディアによって帰属の仕方が違うという特性がありますね。それと、メディア・ミックス、マルチメディアとはいいません、いろいろなメディア、本も読むし、テレビでも勉強するし、字引もひくし、CD-ROM で検索もするし、パソコン通信で人から知恵もつけてもらうというようないろんなメディアをミックスして、学生たちが自分で学習をする、その時のですね、総合的な原因帰属というのはどういうことになるのかということがもし分かりましたらお願いしたい。

進行　どうぞ。

佐賀　確かに重要な問題で、現実の教室場面、あるいは個人の生活においていろんなメディアを、ある時はこれ、あるいは同時にこれとこれというふうに使うってことは多いにあるわけですから、そこのところを調べなきゃいけないんですが、私自身はまだやっておりません。それともう一つ、テレビについては番組のでき、作り方というふうに今坂元先生がおっしゃいましたが、私が使いました原因の帰属先では、こういうふうにきいてます。番組の作り方というよ

りは、テレビはいつも易しいから。これが一般的難易感に帰属させるという理由の記述の仕方です。テレビはいつも易しいから。あるいは特定的難易感、いずれにせよ外側の理由ですけれども、自分の内側の理由ではなくて外側の理由ですが、特定的な難易感については、その番組が易しかったからと、こういうふうにきいてまして、テレビからの学習の成功の理由を小学生にもききましたし、中学生にもききましたし、大学生にもききましたし、パキスタンの遠隔教育で学んでいる成人にもききましたが、ことごとく共通してテレビはいつも易しいから、あるいはこの番組が易しかったから、というところにもっていく人々が他のメディア活動の場合より多いという。それと、そういう一般的な帰属傾向と個々の学習場面で特定の材料を用いたとき、テレビは別に一般的な番組を流しているわけではなくて、特定の番組を流しているわけですから、瞬時に内容の価値もたいていの人は判断しちゃいますので、番組が始まったとたんにですね、自分に合うかどうか、意義深いかどうかという価値判断もしちゃうようなところが人間にはあるように思いますので、その時々に働く帰属のもって行き先と、やっぱり一般的態度の関連もやっぱり調べてみなきゃいけないというふうなことで、それがメディア・ミックスあるいはマルチメディア状況になったときにどう働くのかという問題は大変重要な問題でありながら、難しい問題でじっくりとある教室の場面を観察の対象としながら、実験計画法というよりは相関分析、ないし回帰分析といったような方法で多重変数関係の時間的な影響関係を見ながら調べていかなきゃいけないなというふうに思っています。十分な答になりませんで。

坂元　もう一つうかがっていいですか？　その場合に、ヴィゴツキーの最近接領域のお話もされましたよね、メディアによって最近接領域の幅が違うと思われますか？　例えば、本の場合はわりと小さいけれども、テレビなんかはかなり広くとれるとか、そこら辺はいかがでしょう。

佐賀　だんだん、やんなきゃいけない課題が坂元先生によって増えてくるばっかりで困った。どうでしょうねぇ。最近接領域のことを踏まえて直になされた研究は・・・。

坂元　研究はあんまりないと思うんで、佐賀先生の仮説をうかがえれば。

佐賀　テレビというよりはおそらく、大変よく工夫された、中身のあまり詰まっていないある種のコンピュータ・ソフトの方が最近接領域の考え方にうまく乗るかなということは考えてはいるんですが。それくらいで申し訳ございません。

坂元　いやね、ちょっといいですか？　例えばね、テレビとか、本とか、いろんなメディア・ミックスを考えたときに、最近接領域の非常に長く取れるのが、例えばテレビであるとすると、テレビで、かなり最近接領域を広く取っておいて、それから最終的には読書みたいなことで最近接領域を小さく、しかし本当に人間が世界を認識の面で広げていくっていうようなね、メディア配列みたいなことが、あるいはメディア・ミックスなり、メディアのオーダリングみたいなことが考えられるんじゃないかということなんですよね。

佐賀　その場合にも、メディアとその中身という関連は常に出てくるような気も致しますが。

進行　ええと、今のに関連して、かなり、もうちょっと高度なコンピュータをそういうことに利用するという意味では対馬先生はいかがですか？

対馬　ちょっと議論がいまひとつよく分からないところがあるんですけど、最終的には人間の世界認知というのは、シンボルに帰するだろうと思います。そうしたときに、今の場合に、メディアを見せた時に、そのメディアが非常に要約可能性が高いものと、そうでないものが当然ありますよね。そうしたときに、そういうことを踏まえた時に、本当にそこに研究の基盤と言うのか、要するに研究のドメインがあるんでしょうかね。というのは、あまりにパラメータが多すぎて、何かの結論を出したら、それはお前さんが使ったメディアのせいだよとか、媒体のせいだよとか、ある種の要約可能性を中に含ませているからそういうことになったんだよとか、いろんなものが出てくる決まっている。特に大学教育の場合には要約可能性というのは、先ほど申し上げたように非常に重要です。そうしたときに、意味は自己に内在するのか、メディア自身がそれを生成するのか、どういうんですかね、ハイブリッドに持っていてやりにいったとしたら、リアルタイムで状況説明をやるといかにも分かった気になりますよね。人を洗脳する場合のビデオっていうのは皆そういうものを使うわけで、どうも、私、その辺もうちょっと、分かりやすく説明してもらえないかなと思って。むしろ、質問をしたいというところがあるんですけどね。

進行　関連して、ご回答か、あるいは他の議論でも結構です。いかがでございますか。はい、どうぞ、お願いします。元に戻っても結構ですので。出来れば、ご所属と名前をお願いします。

質問者　九州大学の工学部の高木でございます。話が随分飛びますけども、大学全体を見て参りましたら、大学4年間それから大学院も含めて全部で9年間。それから最近は社会人も受け入れて、これを全部面倒見ますというのが今の、これからの大学なんです。こういったシステムは小学校6年間たかだかあるだけで他にはありません。これはある意味では非常に異常な状態かと思われます。それから一方では、先ほどございましたように、大人数教育、それから対面教育とかございますが、100人で対面しても、200人で対面しても、これは到底対面教育とはいえない。それから、今でも少し起こっておりますけども、例えば、高等学校で物理をやってこなかった、化学をやってこなかった、これ、大学で補習をやっております。ですから、その補習をどうやるのかという、それも大学の責任でございます。それから、これは今後もっと多くなると思いますけれども、そういことも含めましたら、マルチメディアとは申さなくても、メディア教育、ビデオ教育、これはもう不可避であろうかと思います。これらを利用して初めて、私どもは多少の時間が出てくると、その時間を利用して真の意味での、例えば、今日、人間教育であるとかという話が出ましたけれども、あるいは演習をやるとか、ディスカッションをやるとか、そういう時間を捻り出す。それがビデオ教育とか、メディア教育だと思いまして、私はメディア教育は不可避であろうし、もうこれに全面的に頼らざるを得ないだろうと、私は

個人的に考えているんですけれども。そうなりましたら、今日、佐賀先生も最初ちょっとおっしゃったかと思いますけれども、大学に入りましてから、高等学校の補習のためのビデオを、あるいはそういったメディア教育をどうするのかと、こういう教材、それから非常に基本的な、例えば物理であるとか、数学であるとか、化学であるとか、そういったものの教材をどうするか。それから、きのうから今日にかけて話があまり出てまいりませんでしたけれども、大学の学生の大多数は、例えば法学部であり、経済であり、あるいは工学部であり、農学部であり、理学であり、これはほとんど、昨日、本日、話が出てまいりませんでした。そういう相手、そういう学生にどう対処するかということが本当にメディア教育の大きなターゲットであるかと思います。ちょっと話が横にそれましたけれども、そういたしましたら、数学とか、基礎物理であるとか、そういった教育の教材が、準備が今どこかで具体的に検討なされているのでしょうか、ちょっとその辺りを端的に、それから私の考え方が間違っているかどうか、それについてもお尋ねしたいと思います。

進行　若干のご質問ですけれども、今のに関連してどなたかご回答、あるいは例示出来る方どなたかいらっしゃいますか？

坂元　例示じゃないけど、ちょっと言葉の使い方でコメントをさせていただいていいでしょうか。メディア教育といいます場合に、メディア教育とメディアを利用する教育と二種類ございまして、メディア教育というのはメディアについて教えるということに、割に業界では使っているんでございます。つまり、言葉について教えるのを言語教育というように、メディアそのものが教育の内容とか対象になった場合にメディア教育と申しまして、それから先生のご質問は、メディアをいろいろな教育に利用するということですね。

質問者　正にそういう意味でございます。

進行　じゃ、メディアによる教育ですね。教材ですとか、方法についてどのように進んでいるかという事例をどなたかお持ちでいらっしゃいますか？　あまりそういう例がないという感じもありますね。

対馬　むしろ注文を付けたいと思います。大学といっても、例えば岡田先生の大学と私どもの大学の偏差値が20違う。70と50です。そうするとそれを同じような意味で、同じ教材を作って標準化してやったからって、うまくいかんに決まっているわけです。ですから、もう少し分解能を高くして、大学という名前をね、赤と黄色と白と緑で書き分けてね、色によって異なった議論を展開する必要がある。そういう意味あいの議論をしなければ、今の実践的なご質問のお答えにはならないような気がします。今日、我々がやりましたのは、そういうことではなしに、もう少しハイブローといいますか、ステップアサイドといいますか、そういう議論をして参りましたので、ちょっと、なんか、非常にお答えしにくい。どなたか、そういう意味も込めて何かおっしゃっていただくか、そうでなければ、当センターのどなたかが、デューティーとして

ならんといけないのでは。

進行　そうすると、佐賀先生あたりどうですか。あ、川島先生。では、教材研究室の室長として、それじゃ、川島先生お願いします。

川島　先ほど佐賀先生から、教材研究室の過去の活動、現在の活動についてご報告がございましたが、教師教材とか、あるいは学芸員の教材作りというのは、ご存知のように資格に関係したものです。ですから、共通教材というものを作る場合には、例えば、どこの大学に行っても教職課程を取る人は取らなきゃならないもの、あるいは学芸員なりたい方は、大学の格差にかかわらず取らなきゃならないもの、そういうものを作る場合には、私どもは非常に作り易い状況にあります。それから、これは、ファカルティ・ディベロップメントに関する北米の文献研究からですが、資格に関係する、医師、歯科医師、看護婦とか、このような分野では比較的ファカルティ・ディベロップメント、すなわち、大学教官の教授能力の向上のための活動が盛んであるようです。これらの職業は皆資格に関係するわけです。この様に見てきますと、私どものような大学共同利用機関で開発できる共通教材で、しかも大学の大小、あるいは国公私立にかかわらず使っていただけるものは、このような資格に関連したものではないかと考えております。

進行　よろしいでしょうか。その辺の分野についてはセンターで十分、今後コミットしていくということもあろうかと思います。他にはいかがでございましょうか。

岡田　今のことに関連して。

進行　はい、どうぞお願いします。

岡田　さて、いかがでしょうかね。大学でいろいろなことを抱え込み過ぎているのではないかと思います。メディアを利用する教育というものは、必ずしも全て大学がそれぞれ自前でやる必要はなくて、いうなれば“外注”してもいいのではないか。それよりも、大学が本来やる仕事は、大学でしかやれない、固有な領域に集中した方がいいように思っております。「大学固有の、他ではやれないような役割は何なのか」あるいは「大学教育の固有な目的は何なのか」—そういうことを本当に浚い出してみる作業が、是非いっぺん必要なのではないかという感じが致しております。

なお、「高等教育教授システム開発センター」というようなものをやっております人間として申しますと、いろんな、知的世界（intellectual worlds）ごとの基礎教材というようなものを、例えばこの「放送教育開発センター」みたいなところから強力なお力添えをいただいて開発するようなこともやってみたいと思っております。実は、京都大学の中でもかなりの先生がたが、個々バラバラにですけれども、教材作りや授業法に工夫を凝して一生懸命な方々がいらっしゃるんです。そういう方々の要求や経験や知見を、うまく我々のセンターが全体を糾合

するような形で、これこれしかじかの意図の教材を作りたいんだがということで、こちらのセンターに相談にのっていただいて、専門的な知恵を活用させていただけるようなことが出来れば、非常に幸せだと思っております。そういう点でも重ねて宜しくお願い致します。

進行　センター、あるいは他の外注ということで教材が出来ていくと、そうすると今後指摘のようにそれ以外に本来もっと大学の教官がやるべきことがある。研究を除いてですね、教育に関して、例えばもうちょっと具体的に、教材作り、教材をメディア化する以外で本質的に大学ができるというのはどういったことでしょうか。

岡田　先ほども申しましたように、私は基本的に伝統的な大学を、しかもアンダー・グラデュエトの教育を念頭において発言しておりますが、そこで基本的にやらなければならないのは、要するに、これまでリベラル・アーツと呼び慣わされてきた部分ですね、教養教育です。これを私は主眼にすべきだと思っております。

進行　それらは、メディアの利用とはなかなか立ち入れない分野だと。

岡田　いや、決して、決して。メディアを利用する部分が教養教育に関してもたくさんあると思います。そういう意味でも、先ほど来、ご協力をいただきたいと申しているわけです。先ほどちょっと触れましたように、京都大学でアンダーグラデュエト教育の根幹と考えております「高度一般教育」というのがありますが、これの目的とするところは、それぞれの先生が専門性の高度なところをちゃんと踏まえた上で、しかも一歩、その専門の狭い枠を越えて出て、究極的には「人間とは如何なるものであり、どのような生き方をすべきものなのか」というような根本的な問いを問いかけることによって、個々の学生の内面に“humanistic attitude”人間を尚ぶ心の姿勢を啓培することであります。一個一個の科目を取り挙げて見れば、必ずしも十全な教養教育とは言えないものが含まれるかも知れませんが、例えば、経済なら経済、あるいは政治なら政治、農学なら農学、薬学なら薬学という、それぞれの専門性を踏まえた上で、その上でなおかつ人間とは何かを問い、人間存在に本当に役立つような薬学は、あるいは農学は何かというような姿勢で講義を工夫していただけば、それは京都大学全体としては、非常に優れた高度な一般教育、つまり教養教育になるのではないかと考えて、そんなチャレンジをしようとしておる最中でございます。

進行　ご意見ですか？　どうぞ。

対馬　ちゃちゃを入れたいんですけど。私の息子、実は京大に行ってまして、「お父さん、京大の先生、むちゃくちゃ教えるの下手だよ。」って言うんです。これには理由があると思います。私学というのはいい教育をしなければ生き残れないわけです。そういう下部構造があれば、その努力というのは当然なされるわけですし、やらない人間は放逐されるわけです。ところがある程度以上偏差値の高い大学の場合に、本当にその下部構造が出来ていて始まるものであれ

ばいいんですけども、私、どうもお話をうかがっていた時にね、本当にその必然的な下部構造が何なのか見えて来ないんです。先ほどの議論で、科学技術とおっしゃいましたけど、科学と技術というのは心の方向として正反対のところにある。それは、科学というのは本当は哲学から根ざしたものですし、技術というのは勿論、医者から、初めは馬を扱う人が医者をやっていたわけですが、そこから始まったものです。そういうものを一視同仁に科学技術という視点でとらえてみても始まらない。そうじゃない意味あいでの非常に、1万人にひとりの人間とか千人にひとりの人間を教育するための教育と、我々がやっている国民教育、私学なんか特にそうですが、そういうところでのメディアの要求度というのは違うんだと思います。私学の場合にはそれをやらなきゃ生き残れない。また、中で学生の到達度が分散してしまってどうしようもないことがある。また、私学というものは非常に人間が少ないわけです。教員が少ない。少ないところで何とかしようと思ったら嫌でも機器に頼らざるを得ない。そういう苦しさの中でいろんな工夫をやっていって、いろんなことをやりに行くという意味で、いろんなメディアとか、コンピュータ使って教育をちゃんとやりに行くというところは、言っちゃ悪いんですけど私学の方がうまくやっている。なぜかといったら、そうしなきゃ生き残れないからです。そこのところの議論もなしに、あんまりハイブローのことをおっしゃられても、私はちょっと待てよということを言わざるを得ない。

進行　よろしいですか？

岡田　いろいろ申し上げたいことがございます。京都大学が一般的にただのハイブローの、教え方の下手な先生ばかりということではありません。私なんかのところにご相談に見えます先生方は、本当に熱心に教育の問題に関わって、いろいろな工夫をしていらっしゃいます。そこで、よくお薦めしますことは、まずご自分の授業をビデオでお撮りなさい。それを、ご自分でまず振り返ってご覧なさい、と。そこから初めて問題が始まる、ということを悟ってくださる先生方は実は、非常に多くいらっしゃるのでありまして、対馬先生のお坊ちゃんは、多分、少し不運な境遇にいらっしゃるのかも知れないと思います。

それからもう一つ。これまで、「科学技術」と十把一絡げで申しておりましたけれども、本当を申しますと、サイエンスという言葉の語源は“scientia”でございまして、元々これは、バイブルについての「知」であったわけですね。そこが元でございますけれども、しかし今、取り分け近・現代における科学知というもの、18世紀以降の—哲学者で言えばカント以降の—科学知というものを考えてみますと、そこには、方法的な戦略として三つほどポイントがあります。一つは、すべてのものを、物質に、モノとしての要因に全部還元するという、還元主義の立場。それから第二に、しかももっぱら特定の視点からだけの目的合理性を追求していく特徴がある。従ってある部分だけを切り、「截り取り法」と申しましょうか、あるいは局部照射的な形での追求にならざるを得ない。そうなりますと、いきおい他の部分や全体との関係というものが眼中に入らなくなってしまう。そうしますと、第三に、先ほど申し上げましたように、人間のもう一つの面であります「心」とか「魂」、あるいはそれと関連した「意味」とか「価値」、あるいは事の「善悪」だとか「是非」、—こういうものについては全部漏れてしまう、全

て除外されてしまう。そういうことで、実は、技術と科学が結びついて、いろいろな良い面をたくさんもたらして来ているわけでありますが、反面で、先ほど指摘したような各種の環境破壊や、さらには自然の世界にはもともと存在しなかったような化学物質だとか、核物質だとかが、それこそ厄介極まりない形でいっぱい出てきている。そのような、人間が人間として生きていく上での、根っこの部分を逆に掘り崩しているような状況は、「人間」としての価値や理念や意味を一切問わない、いわゆる“scientific technology”（「科学技術」）というものが生み出してきた結果であります。しかも、そういう物質的な面での生存の足元を掘り崩すだけではなくて、心の面、精神の面でも人類は今や破滅の危機に立ち至っているのではないかという認識を、先ほども申し上げたわけです。

進行　岡田先生と対馬先生の対話だけでも、大学改革とメディアの議論がまだまだ続きそうなんですけども、ちょっと他の方からも御意見をいただきたいと思います。私立大学等では、大学改革、メディア投入ということはお金かかりますから、かなり真剣な意志判断が必要かと思いますので、他にその関係等も含めまして、どうぞお願いします。

質問者　江戸川大学の市川と申します。菅井先生におききしたいんですが、私も、教育工学の機器利用に、教授システムというよりも、大学そのもの、講座システムを変えていくということをつなげないと意味がないということはまったく同感でございます。私どものところでも、同じように、講義と、それから演習実習と、ゼミナールと、この三つを結び付けて機器利用をしているわけですが、この場合、ちょっとおききしたいんですが、先生のところで、コンピュータがですね、アドバンス・レベルというところでですね、先生方の、いわゆる研究テーマですね、事前に決まっている研究テーマの中に学生そのものを入れていくと、つまりそれにparticipationさせていくという事例が出たんですが、その場合ですね、既存のテーマってものが出た場合、学生の方の関心は非常に多様化していると思うんですね。あるいは非常に創造的なエネルギーをですね、創造的といっても、私どもから言えば幼稚であってもですね、“僕はこういうことをしたいんだ”というような意志がありますね。そういうものとの調和を、どういうふうに図ったらいいのかと、これが一点と。それから大阪大学の場合、私どもと違って、非常に学生のレベルは非常に優秀だということを前提にしても、学生のレベルはやはり多様化していると思うんですね。そうすると、学生のレベル、関心の多様化という問題と、こういう一つの大きなプロジェクトの中へのparticipationの問題、この辺はどういうふうにやっていらっしゃるかお教えいただければ有り難いと思います。

進行　菅井先生、恐れ入りますが、なるべく簡潔にお願いします。

菅井　ああ、そうですか。市川先生から質問をいただきました。非常に大事な点かと思うんですが、先ほども申し上げましたように、学年始めに、ああいう形でまずは希望を取るわけです。こういうプロジェクトがあるのでその中に加わって欲しいと呼びかけるわけです。そこで、私どもの方では、出来るだけその応募を尊重してやります。その中で、やはりこうしたやり方は

時間がかかることでございまして、実は実験実習以外の時間でもやっております。日常的に集まる場所がありますので、そこでやることになります。その中で、私どもも具体的に説明したり、また読むべき論文とか、関連のものとか、調べるものとか、というようなこともそこのところで結構指導してやります。また、学生の方も結構それに乗ってくるわけでありますが、それは研究課題にもよるのです。そこで研究に関連するのでこういう文献を読んで欲しいと、学生の方から逆にゼミへ要請がきます。そういうのも自由に出してもらうようにします。現在質的なアプローチが進んでいるので、これまでの客観的な量的な方法ではない解釈を中心とする民族史学的なアプローチなどについてもしばらくやって欲しいなどと言われると、こちらもそれに応じてみんなで討議をします。ですから、問題を学生の方も提起してくることになります。困っているような問題ですと、学生が提案して、それを、じゃ、ゼミの時間でやろうというわけです。また、研究の歴史的なものですと、講義の時に述べるから、君それに出席してくれというような形もやるわけです。ですから、全体として研究の文脈に乗せまして、その中で一人一人の多様なものにも、全体の中で対応するというようなことを我々意識的にやっているわけです。そんなところです。また詳しいところは後ほど。

進行　フロア、ないしは講演者の先生方でまだご発言のない方、どうぞ。いかがでしょうか、他には。はい、どうぞ。

菅井　岡田先生にですが、私はこれからの大学教育における教授法を考えます時に、やはり岡田先生のところが非常に大事になるんだろうと思うんです。先導的センターが京都大学にできるわけです。その中で、岡田先生のお話でメディアとの関連はうかがったのですが、それよりも、本来先生はこれから大学教授法をどういうふうに変えて行かれるのか、その辺りについて簡単でよろしいんですが、どういう構想をお持ちなのか、私まだ先ほどいただいた資料読んでいませんので、その辺りご説明いただければ幸いなのですがいかがでしょうか。

岡田　いや私は、狭い意味での「教授法」という面では全くの素人でありまして、具体的にはこれから勉強をして行こうというところでございます。いわゆる教授法につきましては、ご承知のように、これまで大学に関してはまったく問題にされてきませんでした。初等中等教育における教授法については、例えば、易しいものから難しいものへ、具体から抽象へというような原則が、あるいは授業への動機づけとか導入の手順等々も工夫されてきました。しかし、他ならぬ「大学」での教授法となれば、それらの延長線上で考えられるものではないと思います。やはり、大学生であります以上、自ら何かを求め、自発的・創造的に学習を進めていくことが非常に大切になろうかと思いますから、そういう意味で、創造的活動（creation）に直接関わるような「教授—学習」のプロセスを研究対象として臨床教育学的に分析し、課題発見的な授業モデルとか、意欲をどういう具合に喚起するか、といったプログラムが有り得るのか、その辺りのことが本当に研究・開発できたらいいのではないかと考えております。

進行　ありがとうございます。他にはいかがでございましょうか。ご意見、ご質問ありました

ら。どうぞ、あちらの方。

質問者　慶応義塾大学の渡辺と申します。私は教員ではなくて、総合企画室というところにいる職員でございまして、大学の管理運営の方に関わっている者なんですけども。それで、大学のあり方ということで、先ほど岡田先生の方からちょっとご発言がございましたので、そのことに関して私の考えていることをちょっとお話したいと思います。例えば、今日見させていただた通信衛星を利用した公開授業とか、あるいはネットワークでいろいろ知識が集積されていく、そういった中で授業とかですね、そういったものの知識が集積されていく、そういったことでどんどん進んでいくとなると、まあ、大学が全部それになってしまうとは思いませんけれども、そういった中で、いろいろな大学間の中で、そういったものを利用して、単位互換をしていく。あるいは一般の社会の人々の中、要するに大学生じゃない方もそういったものを利用して単位が認定されていくと。そういったようになってくると社会の中での大学のあり方そのものが、ちょっと今と違って来るんじゃないかと。そういったときに、特に私立大学は、今、逆に、そういったものが進んで行く最中では私立大学というのは自分たちの独自性を出すためにそういったものを一生懸命進めて行こうとしますけども、だんだん、そういうメディアとかネットワークというのは標準化していく機能を持っていますから、最終的にはもう、どこの大学とか、そういうことが関係なくなってきてしまうところがあるかも知れません。そういったときに初めて、大学のあり方、伝統的な、大学でしか出来ない機能をもう一回考える。あるいは、我々は私学ですから、私学の独自性というもの、慶応の独自性というのをそういった中でどうやって出して行くかというのが、これからのメディア時代、マルチメディアだけでなくですね、メディアと大学というのを考えていく時に我々の課題になるのではないかなというふうに考えております。以上です。

進行　ご意見ということでよろしいですか。

質問者　はい。

進行　どうも有り難うございます。次の方どうぞ。

質問者　北海道教育大学の徳岡と申します。先ほど共通教材の話が出ていたんですが、それをどういう形で使うかということが実際問題として出てくると思うんですが、例えば私、教員養成の方で放送教育開発センターのビデオを使わせていただいていますが、10本のビデオがあればその中で自分の授業にふさわしいというか、自分の授業で使える場面というのは、そのうちの２割とか３割で、使う側の方で選択することが必要になってくると思うんですが、共通教材ということが話題になった場合に、それを使う使い方までビデオを作った側が指定した方がいいのか、それとも教材はあるけれども、その使い方は大学の授業者ないしはビデオを見る学生に任せた方がいいのかということが、私の質問です。で、もう一つはその関連で是非、放送教育開発センターにお願いしたいことがあるんですが、私、授業をやるときにビデオをいろんな

ところから探すんですが、例えば範例学習とか、系統学習とか、問題解決学習とかを、ことばと映像で是非教えたいんですがなかなか適切な映像がなくて困るんですが、是非、そういうクリップアート的というんでしょうか、データベース的な、百科辞典に載っている項目に対応した映像があるような、そういうような教材というか、資料を是非開発していただきたいというのが希望です。以上です。

進行　はい。じゃ、希望はお受けするといたしまして、前者の質問、どなたか特定の方にお答いただきたいということございますか？　なければ、どなたか代表して、では、坂元先生お願いします。

坂元　放送教育開発センターで教師教育用の教材を作ることにずっと携わって、お手伝いさせていただいておりましたので、ちょっとお話申し上げますと、実は大学の教員養成の連絡協議会というのが全国組織でございまして、そこで教師教育をするときに、大学で、学校現場で何が起こっているかを教えなくてはならないわけです。今までは先生が口で教えたり、スライドを見せたり、いろいろやってらっしゃるんですけれども、やはりビデオに学校の現場を撮って大学へ持ち込みますと、先生が大学の中で現場についての指導をより明確にできるだろう。そういうニーズが非常に強かった。全国調査を致しまして、そういうニーズが高いということが分かりました。それからいろいろ先生方とディスカッションをしてまして、今、放送大学の話をちょっとしていますが、放送大学は偉い先生がお出になって、お話をなさるのを、直接学生が受ければそのままうけたまわれますね。あれを大学の先生が大学の授業で使うことになると、先生によっては大変喜ばれる方もあるが、先生によっては、俺が教えるのに、私が教えるのに、あの偉い先生が私の授業に入ってくるから使えないとか、私の沽券にかかわるというので、ちょっと抵抗感があるわけです。そういうことが、教師教育を作るときにも出てまいりまして、つまり大学の先生が自分が授業はやります、その時に学校の現場を素材として入れて使いたい。そういうことがございましたので、無編集で、技術的には編集があるんですけれども、実際に学校の現場で、教育実習がいかに行われるかとか、誰それさんの授業はどうであるとか、実習生の授業はどうであるかという実態を撮りっぱなしに撮っちゃう。但し先生と子供とのやり取りを全部言葉に書いて、それをプリントにして付ける。ですから、授業の実際に起こった様子をビデオにそのまま撮って、そこを言語化しまして、合わせて先生に使っていただく。そうすると先生は自分の授業の中で、言葉のやり取りの部分をとって、ここはこういうふうに、実習生は直さなきゃいかんよとか、これは大変うまい言葉で思考を呼び起こすような発言になっているよとかということを、プリントと映像とを両方合わせて、自由にお教えになるというような使い方。そうじゃないと、全国の先生に使ってもらえないだろうということだったわけです。その方針でずっと、初期以降作っておりました。だだ、作って下さる方が民放とかNHKのプロのプロデューサーにやっぱり撮っていただくんで、その方々には必ずしも面白くない。映像を作る観点からすると、ただ撮りっぱなしでしょう。そこで、時々偉い先生が出てきて、放送大学用のパッケージにしてまとめて出すというようなことが、ある時期から入り始めてきたんですけども。そうすると、大学の芝生としては、自分が教えることに、パッケージになったも

う一つの授業を持ち込まなくてはならないというので、やはり先生方に抵抗感が出て、なかなか普及しがたいということが起こってきております。今は分かりませんけれども、当時、もう10年近く前、もうちょっと前になるかも知れませんけれども、作り始めたときは、そういうものを作って完成前に先生方に見てもらって、この教材はこう直せという注文を取って、また作り直してもらうという、大変手間をかけて、お使いになる先生方の要望を受けた形の番組を作ってきました。今、全部で1万何千本か、教員養成系の大学に入っております。どのぐらいお使いいただいているか分かりませんが。その中に、いろんな事例、特徴的な指導の事例もそのまま記録しようというようなアイディアもあります。ただ、制作の方のキャパシティがおありになって、年に5本とか、6本しかお作りになれないようなので、なかなか種類が増えていかないんですけども、その辺は今日のご発言なんかがあって、また放送教育開発センターで大きな予算を付けて下さるとか・・・。一番の問題は予算ではなくて、ディレクターさんとスタジオの関係のように承っておりますが、その辺で、現場でお使いになるニーズと実績が上がれば上がるほど、皆さんお応え下さるんじゃないかと思っています。

座長　残り時間が少なくなって参りました。簡潔にお願いします。どうぞ。

菅井　今の坂元先生のお話と、私、関係しているだろうと思うんですが、また今朝ちょっと遅れてきて、教材の共通化の話は私には誤解があるのかも知れませんが、おそらくパッケージのすごいものが作られるとかえってそれが逆の向きに働く場合もあるんじゃなかろうかなと思います。むしろ、大学というところは、やはり研究活動と教育活動の両方考える必要があると考えます。特に研究の方ですと、やはり自分がやった研究を学生の前で話していくということが基本になるんじゃなかろうかと、僕は思うんです。そして、自分のクリエイティビティを発揮して、自分が研究したものを学生の前で話して、そうしたことが各大学でなされると、それこそ良い大学教育になっていくと思うのです。そう考えますとあまり、何んていいますか、パッケージ的なすごい共通教材が作られて、皆でこれを使っていったらかえって大学教育の画一化にも結びかねないんじゃなかろうか心配します。その辺に十分気をつけて、これからどういうふうなものを作って行くかということが、考えられる必要があるんじゃなかろうかと思います。基本的には大学というのは研究活動に基づいて、自分なりの教育をする部分があっていいでしょうし、それがむしろ中心になるべきかなというふうに、私は感じるんですが。

進行　どうぞ。短くどうぞ。

対馬　普通、大学の教育というのは基礎教育、基礎専門教育、専門教育というふうに分かれますね。そうしたときに、下のあるレベルというのはパッケージ化したものでも行ける可能性は随分あるわけです。だから、そこら辺何もかも一緒にして大学の教育と言い出すともう議論は確かに、菅井先生がおっしゃったところに、終局的に収束してしまいます。我々の大学等でも勿論、いわゆる自己点検、自己評価という形で教育の見直しをやると、それを分けて、その基礎教育の部分とか、基礎専門の部分まで全体の半分くらいの単位に関しては、教育というのは

非常にルーティーン化とか、到達度評価であるとか、そういうやり方でやる。一方、専門教育というのは、今、菅井先生がおっしゃったような形でという。私、やっぱり、それはなかったら、議論が収束しないと思います。それだけでございます。

菅井　いいですか。

進行　はい、どうぞ。

菅井　今の件ですが、それでも私は、あまりレベルをですね、がっちりおさえて、この段階ではこれでやるんだというよりもやはり、ここでもクリエイティビティを発揮していただいて、研究活動をされたものをやられる方がいいんじゃないかなと思います。

対馬　なぜそういう話が出てきたかといいますと、大学の教員に関して、勿論よくご存知のように、ある教員に「お前、研究やっているの？」と聞いたら「いや、教育が忙しい。」と答えた。同じ人に「お前、教育やっているの？」と聞いたら「いや、研究が忙しい。」と答えたという笑い話を誰でも知っているわけです。そういう意味でいったときに、ある種のものの教育をちゃんとやるデューティーというものを教員に押しつける、変な言い方をすればね。それをするためには、あるレベルの教育というのは、どうしても、むしろそういうものだよという認知を経て教育をやらなかったらあかへんのんだよ、というのを認識さすという意味でも、やはり、そういうふうに教育を三つに分けてやるということは、我々のところでもやらざるを得ない。放っといたら教員は研究ばかりするわけです。だから、どうもお話しが性善説に立っているような気がしてつまりません。我々、どうも関西人は性善説に、(いや実際の関西人がどうか分からないんですがね、)立ってないというところがあるので、そこで議論がかみ合っていないと思います。

菅井　実はですね、ある国へ行きまして、教員養成大学で半年間仕事をしましたら、その大学はある意味でイギリスの影響を受けていて、研究がほとんどないんですね。教育だけなんです。そういう大学はどういうふうになるかと、教員養成大学ですが、ちょっと、いろいろ考えさせられたことがあります。やはりわが国の大学というのはそういう意味ではいいんだなと。研究活動があるから、というふうな感じを持ったものですから。

進行　ええと、非常にいろんな問題がありますけども、もう時間が過ぎております。もし、ここで言っておかなければ、このまま帰れないという方だけ、あと一人だけうかがいます。どうぞ。

質問者　京都文教短期大学の児童教育をやっている森です。実は私、国立の医科大学の小児科の教授を16年やって、それで定年になって、こちらに移って二つの大学がいかに教育に対して差があるかってことをしみじみと感じたのでちょっとお話しておきます。今いる大学が悪いっ

ていうわけじゃないんですが、今までいた医科大学というのは教育にものすごく熱心なんですね。なぜ、熱心かというと、まず偏差値がある程度高く入って来るんです。それで、教科書を読んでいく講義をすると途端に出席率が20パーセントに落ちるんです。はい、20パーセントしか出てこない。それで試験に難しいのを出すと、皆できてしまう。それで結局、臨床の教育は講義の時間を大幅にカットして、要するに教壇に立って教科書にあるようなことを教えるのは止めることにしたんです。じゃ、一体何をやるかということになると、最終学年は講義をしないんですね。病棟にいれて、医者は何をしているかという問題解決型の行動をやらせるんです。そうすると、患者さんと面接して、ある程度そこから病状を引き出すためには、ある程度患者さんに対応する態度が出来ていないとダメなんです。言われたときに、聞かれたことが分からないときき返すことも出来なくなる。それからまた、診察に行ったときにきちっと態度よくやらないと、診察をさせてもらえない。とったことをきっちりとカルテにイエス、ノーをチェックして書くのに、百何十項目の項目の中身が分からないと出来ないという、そういう現場を見せて、しかもいろいろな検査データのマニュアルを出す場合に、全部電算機に入力しないといけない。処方は全部電算機に入れなければならない。そういう教育をまずするということが問題解決型なんです。そのことができるような教育に今変わったんです。医学部が全部変わったんです。それからずっと他の大学を見ていると、まだ問題解決型のところへ入っていないじゃないか。これからお入りになるときに、このメディアを用いる教育、メディアの教育というのが大変重要になるんじゃないかというふうに考えております。

進行　他にも意見たくさんあるかと存じますけれども、時間がオーバー致しました。ここらで打ち切らせていただきます。最後に本日の閉会挨拶といたしまして、放送教育開発センター研究開発部長菊川よりご挨拶申し上げます。